

■ PCN だより**PCN Volume 64, Number 5 の紹介 (その 1)**

2010 年 10 月発行の Psychiatry and Clinical Neurosciences (PCN) Vol. 64, No. 5 には, PCN Frontier Review が 1 本, Review Article が 1 本, Regular Article が 14 本, Short Communication が 2 本, Letters to the Editor が 4 本, 掲載されている。今回はこの中から外国から投稿された Regular Article 8 本と Short Communication 1 本の内容を紹介する。

Regular Article

1. Neurocognitive functioning in women presenting with undifferentiated somatoform disorders in Oman

Samir Al-Adawi, Ibrahim Al-Zakwani, Yousif A. Obeid, Ziad Zaidan

Department of Behavioral Sciences, College of Medicine and Health Sciences, Sultan Qaboos University, Sultanate of Oman

オマーンにおける身体表現性障害女性患者の神経認知機能について

【目的】身体表現性障害患者の神経認知機能に関する報告は欧米以外の地域からは不足している。本研究では, アラブ・イスラム社会であるオマーン of 精神科臨床における鑑別不能型身体表現性障害と診断された患者について認知障害, 健康に関するパラメーターについて検討することを目的とする。【方法】鑑別不能型身体表現性障害患者 (n=20) と健常対照者 (n=18) とについて, 注意集中指標, 遂行機能, 気分, 身体化, 自律神経機能について検査した。【結果】鑑別不能型身体表現性障害患者では, 健常対照者と比較して, 作業記憶, 遂行機能, 不安, 睡眠の質, 精神身体的に表現された心理的ストレスにおいて差異を認めた。【結論】我々の知る限り, 本研究の

結果は欧米以外の国において鑑別不能型身体表現性障害に見られる神経認知機能の障害を示した最初の報告である。このような研究は, 身体表現性障害のような精神機能を低下させる頑固な病態の理解に役立つ可能性がある。

2. Health related quality of life and restless legs syndrome among women in Sweden

Jan Wesström, Staffan Nilsson, Inger Sundström-Poromaa, Jan Ulfberg

Department of Women's and Children's Health, Uppsala University, Sweden

スウェーデン女性におけるむずむず脚症候群と健康 QOL 指標

【目的】むずむず脚症候群 (RLS) は, 女性に多く年齢とともに有病率の高まるよく見られる神経学的な異常運動疾患である。健康関連 QOL (HRQoL) と RLS との関係については, これまであまり検討されてこなかった。本研究では地域住民を対象として RLS が HRQoL に与える効果を検討することを目的とした。【方法】スウェーデンの一般住民から 25~64 歳女性をランダムに 5000 名抽出し, RLS 診断のための質問紙と HRQoL 調査のための 12 項目の質問紙を送付した。RLS の HRQoL に対する効果は, RLS 陽性者から自己申告による糖尿病, うつ病, 心臓疾患, 筋関節痛の四つの疾患を有する者を除外して検討した。【結果】RLS 陽性者の精神性 HRQoL は, すべての年齢層において RLS 陰性者の SF-12 得点と比較して低かったが, 35~44 歳の年齢層では有意差を示さなかった。RLS 陽性者の身体的 SF-12 得点もまた, RLS 陰性者と比較してすべての年齢層で低かったが, 45~54 歳の年齢層においてのみ有意差が認め

られた。RLS による HRQoL へのこのような効果は合併疾患を補正した後も認められた。【結論】 RLS 陽性の女性では精神性 HRQoL は RLS 陰性者と比較して低下していた。RLS による身体性 HRQoL への影響は少なかった。RLS を有する女性に認められる QOL の低下は RLS を同定すること、および、RLS を有する人への対応の必要性を示唆している。

3. Association between FOXP2 gene and speech sound disorder in Chinese population

Yunjing Zhao, Hongwei Ma, Yueping Wang, Hong Gao, Chunyan Xi, Tainyi Hua, Yaru Zhao, Guangrong Qiu

Department of Developmental pediatrics, Shengjing Hospital, China Medical University, Shenyang, P.R. China

中国人における FOXP2 遺伝子と発語障害との関連について

【目的】 FOXP2 遺伝子はヒトの発語・言語障害に関連することが示された最初の遺伝子である。本研究では、FOXP2 遺伝子多型の頻度を発語障害患者と健常者において比較検討することを目的とした。【方法】 DSM-IV により診断された発語障害患者 150 名と健常者 140 名について 5 個の FOXP2 遺伝子多型 (rs923875, rs2396722, rs1852469, rs17137124, rs1456031) の頻度を解析した。また全患者について FOXP2 遺伝子の主要なエクソン領域の配列を調べた。【結果】 ATG 開始コドンの 5' 上流に位置する rs1852469 多型についてその遺伝子型 ($P=0.001$) についてもアリル頻度 ($P=0.0025$) についても有意差が認められた。Bonferroni 補正後においても患者群では有意差をもって T アリルの方が多かった ($P=0.0126$)。さらに rs2396722T/+rs1852469T は疾患のリスクハプロタイプであった。全患者群の主要なエクソンのシーケンシングを行ったが我々のサンプルでは変異は見いだせなかったが、5 名の発端者において、FOXP2 遺伝子第 5 エクソンにおいてグルタミンをコードするトリプレットのヘテロな欠失が見出された。この欠失によりポリグルタミンが 40 から 39 に減少していることが推察された。【結論】 FOXP2

遺伝子が発語障害への脆弱性に関与していることが示唆され、さらに FOXP2 遺伝子が発語・会話機能に役割を果たしていることが示唆された。

4. Diurnal cortisol patterns of young male patients with schizophrenia

Roelie J. Hempel, Joke H. M. Tulen, Nico J.M. van Beveren, Christian H. Röder, Frank H. de Jong, Michiel W. Hengeveld

Department of Psychiatry, Erasmus University Medical Center, Rotterdam, The Netherlands

若齢男性統合失調症患者におけるコルチゾール日内変動

【目的】 統合失調症患者は健常者よりもストレスに脆弱であり、ストレスにより精神病エピソードが惹起・増悪しやすいことが知られている。ストレスと関係してコルチゾール分泌を調節している視床下部-下垂体-副腎系 (HPA 系) がその生物学的基盤として調べられている。我々は若い男性統合失調症患者の HPA 系の日内変動の基礎値を測定し健常者と比較した。【方法】 27 名の若齢男性統合失調症患者 (22 ± 5 歳) と 38 名の健常対照者 (22 ± 3 歳) について 1 日 5 回 (起床時, 起床 30 分後, 正午, 16 時, 22 時) 唾液を採取しコルチゾール値を測定した。【結果】 日中のコルチゾール値は患者群で健常者群と比較してより低下していた。さらに患者群ではコルチゾール値の基礎値からの増加分を示す AUC_i が健常者群より有意に低下していた。統合失調症群の午前中コルチゾール値の増加と AUC_i とはいずれも陰性症状と逆相関を示していた。【結論】 統合失調症患者は日中の HPA 系感受性が異なっていること、統合失調症患者では陰性症状が強くなるほど HPA 系の感受性が低下することを示唆している。

5. Lipid peroxidation in patients with schizophrenia

Anna Dietrich-Muszalska, Bogdan Kontek

Department of Affective and Psychotic Disorders,
Medical University of Lodz, Lodz, Poland

統合失調症患者における脂質の過酸化について

【目的】統合失調症において抗酸化酵素活性の異常を伴うフリーラジカル代謝の調節に異常があり、血漿・赤血球・血小板・脳脊髄液の脂質過酸化の異常を呈することが考えられている。統合失調症のニューロン傷害は、膜内輸送・ミトコンドリアにおけるエネルギー産生・膜のリン脂質構成の変化・受容体やトランスポーターの変化・神経伝達の変化などを来しうる。本研究ではオランザピンまたはリスペリドン服用中の統合失調症患者について血漿の全抗酸化能 (TAC) と脂質過酸化状態 (チオバルビツレイト反応性としての TBARS) を検討することを目的とした。【方法】DSM-IVによる統合失調症患者 (30名, 年齢 18~36 歳) と健常対照者 (30名) について血漿全抗酸化能 (TAC) と Rice-Evans 法による脂質の過酸化 (TBARS) を測定した。さらに健常者の血漿をオランザピンあるいはリスペリドンとインキュベートした後の TBARS について測定した。【結果】統合失調症群では有意に低い TAC レベル ($p < 0.05$) と有意に高い TBARS レベル ($p < 0.001$) を示していた。健常者の血漿をオランザピンあるいはリスペリドンとインキュベートした後に脂質過酸化レベルに変化を認めなかったことから、統合失調症患者に認められた過酸化レベルの変化は、使用している薬剤に起因するものではないことが示された。【結論】統合失調症患者には脂質過酸化レベルの上昇が認められるが、これは第二世代抗精神病薬によるものとは考えにくい。

6. Quality of life and related factors among cancer caregivers in China

Lu Lu, Bochen Pan, Wei Sun, Lili Cheng, Tieshuang Chi, Lie Wang,

Department of Social Medicine, School of Public Health, China Medical University, Shenyang, China

中国のがん患者介護者の QOL について

【目的】がんによる入院患者の介護者の QOL を調査し、がん患者介護者の QOL 改善のための方法を探ることを目的とした。【方法】2008 年 1~3 月の横断研究である。対象はがんによる入院患者の介護者 358 名。看護師による面接により介護者から QOL、社会背景、介護の必要性、利用できる社会資源、介護の形態、介護者の健康状態を聞き取り調査した。【結果】QOL 尺度の平均得点は 5.26 であった。線型モデル解析では介護者の QOL は、夫婦関係、患者の ADL、疾患の慢性経過と相関していた。患者と介護者の夫婦関係が介護者の QOL と最もよく相関していた。【結論】がん患者の介護者の心理状態は、身体的状態よりも障害されやすい。夫婦関係、患者の障害、介護者の健康状態が介護者の QOL に影響を与える。

7. Increased N-Acetylaspartate/creatine ratio in the medial prefrontal cortex among unmedicated obsessive-compulsive disorder patients

Qing Fan, Ling Tan, Chao You, Jijun Wang, Colin A. Ross, Xuemei Wang, Tianhong Zhang, Jianqi Li, Kemin Chen, and Zeping Xiao

Shanghai Mental Health Center, Shanghai Jiao Tong University School of Medicine, Shanghai, China

未投薬強迫性障害の内側前頭前皮質における N-アセチルアスパルテイト/クレアチン比の上昇

【目的】強迫性障害の発症病理に前頭-線条体-視床-皮質ループの変化が想定され核磁気共鳴スペクトロスコピー (^1H MRS) による検討がなされている。強迫性障害において内側前頭前皮質における代謝産物の検討はなされていないので、今回の研究で検討した。【方法】対象は投薬を受けたことのない患者 10 名を含む未投薬強迫性障害患者 21 名と健常対照者 19 名。内側前頭前野の single voxel ^1H MRS を施行し、N-アセチルアスパルテイト (NAA)、コリン (Cho)、ミオイノシトール (mI) のクレアチン (Cr) に対する比率で定量した。【結果】強迫性障害群では NAA/Cr 比は健常対照群と比較して有意に上昇していた ($F = 4.76$, $P = 0.037$) が、症状の程度、

持続期間とは相関していなかった。また NAA/Cr 比は未服薬群と以前に服薬した群との間に差異を認めなかった。Cho/Cr 比と mI/Cr 比は、強迫性障害群と健常対照群との間に差異を認めなかった。また、健常対照群において NAA/Cr 比と State-Trait Anxiety Inventory (STAI) の trait anxiety score との間に有意な相関が認められた ($r=0.639$, $P=0.010$)。【結論】内側前頭前皮質のクレアチンに対する N-アセチルアスパルテイトのレベルは OCD 患者で上昇しており、この知見は OCD の病態病理に関与している可能性がある。

8. Psychometric properties of the 10-item Connor-Davidson Resilience Scale (CD-RISC) in Chinese earthquake victims
Li Wang, Zhanbiao Shi, Yuqing Zhang, Zhen Zhang
Key Laboratory of Mental Health, Institute of Psychology, Chinese Academy of Sciences, Beijing, China

中国大地震被害者に見る 10 項目 Connor-Davidson レジリエンス尺度による心理特性

【目的】レジリエンスとはストレスやトラウマを乗り越える適応力のことである。レジリエンスを評価することはトラウマ関連疾患の研究や診療において重要であるが、10 項目 Connor-Davidson レジリエンス尺度 (CD-RISC) の有用性と妥当性が報告されている。本研究では中国文川大地震の被害者に対して CD-RISC を用いて検討した。【方法】対象は文川大地震の被害者に対して中国科学院心理研究所により行われた心理支援プログラムからリクルートされた 341 名 (女性 185 名, 男性 156 名, 20~63 歳) である。地震 4 ヶ月後に 10 項目 CD-RISC と Los Angeles Symptom Checklist (LASC) の中の PTSD 項目について評価した。【結果】10 項目 CD-RISC 尺度の原版と同様に中国人被災者についても探索的因子分析では 1 因子モデルの妥当性が示唆された。またこの評価尺度は高い内部一致率 (Cronbach's $\alpha=0.91$) とテスト再テスト一致率 (2 週間の間

隔で $r=0.90$) であった。この評価尺度の得点からは被災者には異なるレジリエンスを示すものがあることが示唆された。さらに本評価尺度得点は PTSD 評価尺度の全得点およびそのうちの 3 つのサブスケール得点と逆相関を示していた。【結論】中国語版 10 項目 Connor-Davidson レジリエンス尺度 (CD-RISC) は心理評価尺度として優れた特性を有しており中国人に対しても適用可能である。

Short Communication

1. Persistent interferon- β 1b-induced psychosis in a patient with multiple sclerosis

Giovanni Manfredi, Giorgio D. Kotzalidis, Gabriele Sani, Alexia E. Koukopoulos, Valeria Savoia, Simone Lazanio, Nicoletta Girardi, Roberto Tatarelli

Psychiatric Unit, Department of Neurosciences, Mental Health and Sensory Functions (NESMOS), Sapienza University, 2nd Medical School, Rome, Italy

多発性硬化症患者のインターフェロン β 1b 治療により出現した持続性精神病症状

インターフェロン (IFN) β は多発性硬化症の自己免疫を抑制するために使用されるが、その副作用としての精神症状が起こりうる。IFN α による精神症状は多く報告されているが、これまでのところ IFN β による精神病症状についての報告は一つだけである。多発性硬化症患者に IFN β 1b (250 μ g/日) 治療開始 16 カ月後に幻聴・妄想・攻撃性が出現した。患者は抗精神病薬の投与により 1 カ月で精神症状は消退したが、抗精神病薬を減量すると精神症状の再燃が認められ、2 年後も精神症状のコントロールのために抗精神病薬を必要とする状態である。この間の MRI では所見に違いが認められないことから、この患者の精神症状は IFN 治療に起因するものと考えられる。

(文責: 武田雅俊 PCN 編集委員長)